

小学生が作る「子どもじゃらん」が  
生み出したものは？

# 狭域日帰りマーケットを動かす

## 子ども視点の

# 「地元観光案内」プロジェクト報告

絶景、グルメにショッピング……。飽くなき観光消費の主役はつねに大人たち？

いえいえ、限られた空間で、日々、活発な動きを展開している集団が存在している。

子どもたち——その視点は街の消費、再活性化に役立つのでは？新たな試みをレポートする。

写真／久保田敦

なぜ、「子どもの視点」に着目してみたのか

観光消費の大きなマスの一つであるファミリー。子連れ旅行と云えば、子どもの年齢と、想定される彼らの

満足度を中心に計画され、週末のお出かけさえも近隣の大型ショッピングモールへ足を延ばすなど、いわゆるレジャー的要素の高い施設を選ぶ傾向が多い。吹き抜けの天井に広々としたフードコート……。広大な敷

地に建てられたゆとりある「非日常空間」は、あらゆる購買欲を満たし、大人にとっても日頃の仕事や育児の疲れを忘れるのに手頃な存在だ。

しかし、これらは総じて大人視点における、家族のお出かけスタイルと言えなくもない。当の子どもたちにとつての「お出かけ」とは、週末だけのイベントに留まっているわけではないのだ。

例えば小学生であれば、大人に比べて限られたエリアの中を日々、濃く深く動き回っている。同じスポットであっても、遊びを共にする友だちが代われば、楽しみ方や見え方が180度違って感じられることだってあるだろう。大人たちから見ればなんでもない日常を、その想像力や

行動力でもっとも簡単に「非日常」に見立ててしまうパワーを持っているのだ。まさに「地元密着型」。しかもコストパフォーマンスが高いと感じなければ消費することはないだろう。実は、子どもとは地域をよく知り、厳しい目も持ち合わせた存在なのではないか。その貴重な視点を取り入れて、例えば週末に隣の街まで足を延ばすきっかけを作るなど、狭域における観光を活性化させることはできないものだろうか。

子どもたちの原稿をまとめた「ふるさと子どもじゃらん」。作り上げる姿は真剣そのものだった



### 「ふるさと子どもじゃらん」 開催スケジュール

2013年

- 7月22日 和光市宿題送付
- 8月7日 和光市子ども大学授業
- 10月24日 朝霞市宿題(編集部手帳)送付
- 11月16日 朝霞市子ども大学授業  
グループインタビュー  
(おでかけ実態調査)
- 11月30日 和光市へのおでかけイベント

## 子どもによる「ふるさと子どもじゃらん」制作決定

その視点を活用するためには、まずは子どもたちの持っている「情報」を引き出す必要がある。一般のガイドブックではおそらくお目にかかれないであろう等身大の情報を。子どもたちに取材をして、スポットやそれをすすめる理由について話を聞き出すのは簡単な方法ではあるが、このプロジェクトが対象となる地域の子どもたちにとってもまた、有用なものにすることができれば……。子どもならではのフレームにとらわれない自由な発想力を存分に発揮させ、彼ら自身もまた満足感、達成感を得られる方法はあるだろうか？

そこで考えついたのが、弊社の媒体である「じゃらん」を利用し、子どもたち自身による観光案内「ふるさとじゃらん」を制作してみることにした。

子どもたちが、自分で選んだスポットを自分で取材し、情報発信するための原稿として完成させるといふのだ。観光地や近隣都市への声かけの中、「子ども大学」を開催している埼玉県の協力が得られることになり、プロジェクトは事実上のスタートを切ることができた。

### 埼玉県の「子ども大学」と協力してワークショップ開催

学校の授業では登場しない、一味違うテーマを学ぶ場として開催されている埼玉県の「子ども大学」。自治体により詳細は異なるが、小学4年生から6年生までの希望者が集まって講座に参加し、「はてな学」、「ふるさと学」、「生き方学」を学んでいる。今回、偶然にも隣接する和光市、朝霞市の2市が「ふるさとじゃらん」制作に共感し、それぞれ「ふるさと学」としてのひと枠をワークショップ

の場として提供していただけることになった。和光市、朝霞市の「子ども大学」担当者にも、協力に至った経緯等を伺ってみた。

「ふるさと」というと昔のイメージがありますが、子どもたちにとっては現代の和光がふるさとそのもの。『ふるさとじゃらん』を作っていく過程で、自分たちのふるさとの姿を捉えて欲しいと思いました。JRC側も和光市側も初めての試みだったので手探り状態でのスタートでしたが、プレストしながら組み立てていくことができたのがよかったですね」（和光市教育委員会生涯学習課 永堀真理子さん）

「朝霞市は都心から20km圏内にあり、交通の利便性がよいいため、都内に出かけて行ってしまいうことが多くと言われるエリアです。この授業が、子どもたちの目で地元の朝霞市を見直すいい機会になればと考えました」（朝霞市教育委員会生涯学習課 高橋安希子さん）

両市ともに、大人にはない視野を持つ子どもたちへ寄せる期待は大きい。日程は、和光市が2013年8月7日、朝霞市が11月16日に決定。可能性が未知数の子ども、それも大人数が関わるということで、開催に向け



の準備が開始された。ワークショップ当日の時間内に原稿を完成させるためには、子どもたちは事前にスポットへの取材が必要となる。まずは和光市の子どもたちへ「ふるさとじゃらん」を作るための、制作の意図や取材、写真撮影のお願いと、取材メモが付いた「宿題用紙」を送付。「地域をほこる授業 ふるさとじゃらんを創ろう」と書かれた紙面にはCMでお馴染みの「にゃらん」にも登場してもらい、子どもたちの好奇心をくすぐるよう工夫を凝らしてみる。まだ会ったこともない大人からの少々面倒なお願いや、興味を持ってもらえるアプローチを心がけた。約2週間後に、子どもたちはどんな「答え」を携えて第1回目となる和光市での授業に出席してくれるだろうか。

## 埼玉県の「子ども大学」とは

地域の大学や市町村、企業・NPO、県が連携して、子ども(原則として小学校4~6年生)の知的好奇心を刺激する学びの機会を提供。学校とは一味違ったテーマを取り上げて、大学教授や地域のプロフェッショナルが下記の項目について教えている。平成25年度は30の子ども大学が開校。

1. ものごとの原理やしくみを追求する  
「はてな学」
2. 地域を知り郷土を愛する心を育てる  
「ふるさと学」
3. 自分を見つめ人生や将来について考える  
「生き方学」





毎日新聞社 竹花氏の説明に聞き入る子どもたち。取材、キャッチフレーズ…編集用語が飛び交い徐々にテンションが高まっていく

ワークショップ

第 1 回

# 子ども大学 わこう授業

2013年8月7日

初対面の子どもたちへ、挨拶と記事作りのディレクション

いよいよ授業当日。まずは本物の新聞記者が、実際の取材の様子やリアルな編集作業について講義。プロならではの紙面作成のコツを伝授していただく。続いて、男女とりまぜランダムに分けたグループ内でのディスカッション。各自が調べてきたスポットについて発表してもらった。ランダムゆえ、リーダーシップを取れる子どもがいるグループでは、よリスムーズな進行で意見交換も活発に行うことができた。

紙面作りに向けてのウォーミングアップも済んだところで、原稿用紙（フリーフォーマット）を前に記事作りがスタート。どの子どもも取材メモを見ながら、文字通り真剣な表情で取り組んでいく。制作時間は40分。慣れない作業にまったく手が止まってしまう子どももいる。「お気に入りスポット」を選んできてもらったが、おすすめポイントが他人へ伝わるように表現するのは、初めて挑む子どもたちにとっては未知の作業だ。取材をしてあれば、すぐに原稿が書きあがるわけではない



(上) 遊び心にあふれた紙面構成は小学生ならではの完成原稿を並べてみんなで鑑賞。同じスポットでも違った魅力を紹介していることも、子どもたちにとっては新鮮に感じられたようだ



## 大規模公園が一番人気だが地元商店を紹介する記事も

子どもたちが選んだスポットは全部で28カ所。7名が広大な敷地を誇る樹林公園とその周辺を推薦。ほかにも市内の自然系、施設系など多数が無事、記事となった。

子どもたちが選んだスポットは全部で28カ所。7名が広大な敷地を誇る樹林公園とその周辺を推薦。ほかにも市内の自然系、施設系など多数

### ワークショップ当日のプログラム (和光市、朝霞市共通)

挨拶  
じゃらの紹介、制作の目的など

毎日新聞社  
竹花氏による制作ディレクション

グループシェア  
グループ内での発表

個人ワーク

完成原稿を提出

原稿発表  
事務局より数名選出

### 次回への課題

- スムーズな原稿制作をするためには、大人のサポートが必要な場合がある。
- 制作についての事務局からのディレクションは簡潔にする。
- 子どもが制作に使える時間を長めに確保する。
- スポットは「お気に入り」ではなく、「おすすめ」を挙げてもらう。
- スポットの正確なデータを取材できるよう、原稿用紙等を工夫する。

この初めての試みは、多くの子どもたちが達成感を得られる結果となり無事終了。いくつか見つかった課題は、第2回目の授業で生かされることになった。





(上) みんなが飛びついた、切り抜き手法。文字をキャプションのように置いてみたり、写真を斜めにしてみたり。楽しみながら表現の幅が広がった(右)レイアウトのみならず、書かれているコメントまで、とても小学生とは思えないほどの出来映え



特徴をずばりひと言で言い切ったキャッチフレーズが目についた

ワークショップ  
第2回

# 子ども大学 あさか授業

2013年11月16日

ディレクションは短く、  
子どもたちの制作時間を長く

和光から3カ月。前回のワークショップで見つけた、いくつかの反省点を踏まえつつ準備を進める。宿題の事前送付は同様に、しかし今回はオリジナルの「編集部手帳」も作成して同封。目的はもちろん、より充実した原稿制作のため。電話番号や営業時間などのデータを記入する箇所が設けられていたり、観光ガイドとして必要な情報を漏らさず取材できる工夫を施してある。しかし何よりも、この手帳を受け取った「子ども編集部」たちのモチベーションがいやが応でもアップしたことは間違いないはずだ。

また、和光では初めての試みゆえに時間をかけた紙面作りについてのディレクション。聞き慣れない用語を受け入れる子どもたちの集中力と、あとに続く原稿制作に充てる時間を考慮し、朝霞ではより簡潔にまとめることにした。参加した子どもは64名。さらに「子ども大学あさか」は、市内にキャンパスがある東洋大学の学生ボランティアグループがメンバーとしてサポートしている。保護者などの見学者も合わせると総勢100名近い熱気の中、授業が始まった。



作製した「子ども編集部手帳」。取材から原稿完成まで常に子どもたちと行動を共にしてきた

おすすめスポットの舞台裏まで  
取材してくる子どもも

原稿の制作時間は50分。子どもたちにとってはあつと言いつ間の時間だっただろう。今回もやはり手が止まったまま何も書き出せない子がいたが、各グループに2〜3名ずつ付いている大学生たちがフォロー。子ども大学ですでに顔を合わせている間柄だけに、粘り強く親身に導き、また信頼してアドバイスを耳を傾けるといった光景が見られた。

制作ディレクションでの、切り抜き写真はレイアウトをダイナミックに見せる」というアドバイスを受

け、あちこちから写真を切り抜く音が聞こえてきた。わかりやすいキャッチフレーズとともに、大人顔負けの原稿が完成。また編集部手帳効果なのか、キーキ屋さんの厨房にお邪魔して、オーナーの顔やデコレーションの過程を撮影させてもらったり、紹介している児童館の館長さんからの「お誘いコメント」をもらってくると子どももいた。どのように表現すれば相手にそのよさが伝わるのか。取材時から考えて行動にうつす姿に、ワクにとられない子どもならではの可能性を感じた授業だった。



和光市の子どもたち  
おすすめのスポットを、  
朝霞市の  
子どもたちが体験!

## 「おでかけイベント」 レポート

2013年11月30日

知っているようで知らなかった  
“お隣さん”を再発見!

朝霞市の子どもたち11名が、和光市の子どもたちの作った原稿を読んで興味を持ち、イベントに参加。朝10時に和光駅に集合、まずはバスで樹林公園へ。広大な敷地に大はしゃぎした後は徒歩で小学校に移設されたSLや、洞窟探検ができる熊野神社、東京まで見ると紹介されていた百段階段などめぐり、最後はラーメン屋さんで昼食。10カ所を訪ねる旅は、やや駆け足ではあったが、意外と知らなかったお隣の街の面白さを再発見する5時間となった。



第四小学校に移設されたSLをバックに

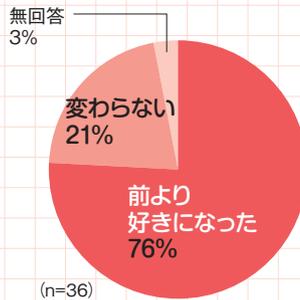
おすすめどおり、数えながら上った百段階段。「百段はないなあ」「思ったより怖くなかったかな」

たくさんのスポットを回って、お腹はペコペコ。今日の思い出を話しながら楽しく昼食



## 子どもへのアンケート 参加した子どもの 「ご当地愛」の変化

### 和光市授業後

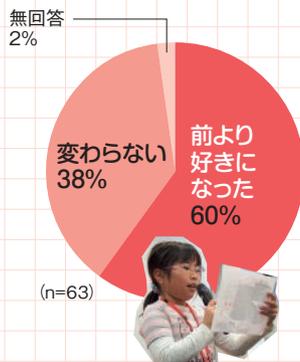


#### ふるさとじゃらんを 作ってみた感想は?

- なんでもないふるさだが、キラキラしてみえた。
- どんなふう読んでくれるのか、楽しみにになった。
- あらためて書くと、こんなにいいことがあったんだと思った。
- 友だちの紹介をみて、あらためて和光を知った。
- 友だちの紹介したところへ行ってみたいと思った。(複数)



### 朝霞市授業後



#### ふるさとじゃらんを 作ってみた感想は?

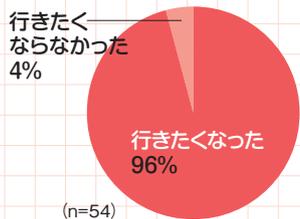
- 書き切った時の達成感がすごかった。
- 自分のオリジナルの記事を書くことができてよかった。
- 朝霞市ってやっぱりすごいと思った。知っているところでも違う見方ができた。
- 同じスポットでも、人によってさまざまな書き方をしていたので楽しかった。
- いろんな場所へ行って、いろいろなことを知りたい。

アンケートから見る  
「子どもじゃらん」  
制作の影響

### ちなみに

和光市の子どもたちが作ったパンフを、朝霞市の授業に参加した保護者に見てもらいました。

#### パンフを読んだあとの、 和光市への来訪意向



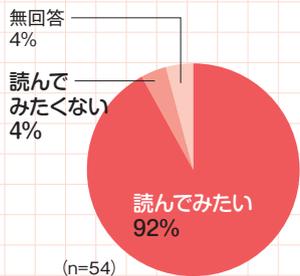
#### 和光市へ行きたくなった理由は?

- 久しぶりに紅葉を見に行きたくなった。
- 和光市の知らないところがたくさん載っていた。
- 以前から気になっていたが、子どもたちがすすめているのでもっと興味が湧いた。

#### 子どもならではの視点や、新たな気づきはあったか?

- 駄菓子屋さんの紹介など、ガイドブックや広報誌には取り上げられないところを紹介しているのがよかった。
- 良い点を一生懸命アピールしているのがよくわかる。
- 階段や坂道、休憩スペースまでもおすすめのスポットになってしまうところ。

#### 他にも子ども視点の パンフを読みたいか



#### 子どもたちが発見した地元のパンフを 今後も読みたい理由は?

- 子どもの目は自然で、枠にとらわれないから。
- 子どもの目線で書いてあり、自分の子どもも楽しめると思ったから。
- 子どもなりの情報の伝え方がおもしろかった。
- 自分ではまだ気づいていないおもしろいところがあるかもしれない、自分の住んでいる町の情報誌を作ることで自分がステキな体験だと思うから。
- 子ども達はどんなものにドキドキを感じているのかが伝わってきたから。
- 大人が何気なく見過ごしてしまっている所を子どもは気が付いて、新たな発見ができそう。
- 子どもが自分で色々な情報を集めて、楽しく読める様、創意工夫した手作りの冊子なので。

## まとめ

# 子ども視点の「地元観光パンフ」制作が、子どもたちと、ふるさとにもたらす変化とは？

地元の人も意外と知らない  
隠れた地元商材の発掘

固定観念に縛られない発想力、表現力に加えて、「ふるさとじゃらん」の記事作りで発揮されたのが、子どもならではの旺盛な「好奇心」だった。どのような場合においても、多数の関心を獲得するものは存在する。しかし、友だちも気づかないようなおすすめスポットをあえて探そうという気持ちだが、結果として、個々の



朝霞ブランドに認定されている「塩味醤油醸造」。昔ながらの杉の木桶で丁寧に仕込んでいる

原稿をまとめた今回のガイドブックに幅の広さを持たせることになった。その一つの例が、朝霞市で昔ながらの方法で醸造されている醤油だ。スーパー等で量産品が割安に手に入る時代、小学生が地元醤油を手にとって吟味することは珍しいと思われる。加えて、友だちとの会話に上ることなどほとんどないのではなからうか。便利な時代だからこそ、身近にありながらも、当たり前過ぎてつい見過ごしてしまう希少な存在がある。他にはない、自分の街ならではのよさを発見してみようとするうちに、そんな地元商材を発掘し、見直し、そして光を当てるという機会にめぐり会えたのだ。

取材を通して、子どもたちの中に  
地元を誇れる気持ちが湧く

原稿を作成するための取材を通して、子どもたちは単なるデータに留まらない、スポットの由来やそこに関わる人々の思いなどに触れることにもなった。大人の旅でも同様に、ストーリーを知った場所へはいっその愛着が湧いてくるものなのだ。「自分たちで取材して書いてみると身近に感じられるし、何より紹介したいという気持ち、住んでいるところを誇れる気持ちが出てよかったです」（前出 朝霞市・高橋さん）「取材を通して郷土愛が生まれ、大人が働く現場の見学・体験もでき



店主の人柄が出るのが地元商店。花を愛する夫婦が始めた朝霞の「花屋まるよし」は、良心価格で人気

たので『生き方学』にもつながりました」（同 和光市・永堀さん）誇りに思える場所を持ち、人に知って欲しいと願う。地域の良さを発見することは、地元を訪れる人を迎えられる力に加え、旅先の魅力を見える「旅する力」を育てることにもつながるのではないだろうか。

## 担当研究員より

### 不便でも丁寧に 愛のある町づくりを

便利なものに大人は勝てない。ここ数年更に進む都市開発によって、昔ながらの近所付き合いや、売り手の顔の見える個人商店などは減少し、都心には高層マンションが、近郊には大型ショッピングモールが建ち並ぶ街並みに代わっていった。JRCがこの冬に実施した「日帰り狭域調査」では、子どもがいる人の5割が月1回以上ショッピングモールに出かけている。

しかし子連れを中心に、週末のおでかけ先に悩むファミリーは多い。先の調査でも7割の人は新たに地域の個人商店や遊びスポットを探してみたいと回答。これらはデータで言うまでもなく、個人個人が思い当たる節があるだろう。しかし事前に適切な情報が得られず、ついショッピングセンターに足が向いてしまうことが多いのではないかと。

思えば子どもを取り巻く環境というのは、実は利便性とは真逆の「不便」で溢れている。保育園の看板は子どもたちの手作り。今なら100円ショップで安く手に入る整理箱も、開いて乾かした牛乳パックで手作り。多様な創造性ある子どもの将来を築くには、不便でも手をかけたもの、愛情のこもったものが必要とされる。手作り感溢れる「子どもじゃらん」の子どもたちの原稿やコメントを見て、心が動かない大人はいないと思う。彼ら子どもの目を通して私たち大人が、自分たちの町と未来を見直し、地域消費の改善と丁寧な地域ネットワーク、愛情のある町づくりに取り組むきっかけになることを願っている。



じゃらんリサーチセンター  
研究員

### 森戸香奈子

調査を中心に研究。「人気温泉地ランキング」「国内線LCC調査」「熱海アースダイバー」など担当